可児工高同窓会報
発行所
岐阜県立可児工業高等学校
同窓会
岐阜県可児市中恵土2358−1
TEL(0574)62-1185

同窓会長　挨拶

機械科七回生　藤田　幸夫

『プロの企業人を目指して』

母校で有ります可児工業高校創立六十周年、誠におめでとうございます。

創立当時は機械、電気、化学の三科でしたが時代の変化に対応され現在四科となりました。この永い歴史の中で一万人を超える卒業生を輩出し、卓越した技術を誇る同窓生の皆さんにて日本工業界や日本経済の発展に大きく貢献して来た事は言うまでもありません。私も第七回生で卒業して、今年ちょうど五十年を迎えました。まだ現役で会社のトップをしておりますが、その根底にあるものは可児工業機械科の三年間にて培った学習と実践のおかげです。工業科目で鉄を削る事に興味を持ち卒業後は切削理論では誰にも負けないプロを目指し専門書を熟読、実践にて探求し、現場管理者となりトヨタ生産方式に関わる生産理論から経営理論と深化し実践と結び付け現在に至っておりますが、今もなお更なる経営を目指して勉強しています。日本もこの六十年で大変革して参りました。

昭和四十七年、私の初任給の六十倍一部の人しか買えなかった自動車は今では殆どの人が所有し、エンジンから地球環境改善にてＥＶ化となり更に自動車が空を飛ぶ時代になりつつあります。通信面では当時、黒電話機でこちらも無い家庭もありましたが現在ではスマホにて小学生から個人持ちです。日本政府は国民の豊かさを求めて日本列島改造論にて大いに高度成長しましたが、その反面、地球環境破壊で地球規模での温暖化にて近年国際的にＳＤＧｓが合言葉になりました。又デジタル化の進歩はとんでもないスピードでＩｏＴ～ＡＩに進化し二十～三十年後には人間がＡＩに使われて人間味の無い無機質な社会にならないかと不安を感じます。

母校である可児工業高校におかれましては六十周年から百周年を見据えた時代のニーズに対応した学習内容を構築され、少子高齢化の中でも新入生が増える東濃中濃地区を代表する人気の有る高校になって頂き在校生諸君は将来、可児市、岐阜県、しいては日本工業界を支えるプロの企業人に成長される事を祈念致しまして六十週年記念の挨拶とさせて頂きます。

校長　挨拶

中西　竜也

令和三年四月に着任いたしました校長の中西竜也です。

よろしくお願い申し上げます。

私は、昭和の終わりから平成の始めにかけて七年間、可児工に勤務しておりました。久しぶりに戻ってきた可児工は昔と変わらず何事にも一生懸命で、純真な生徒たちと、その生徒たちのために全力を尽くす先生がたの姿でした。

そして、今年創立六十周年を迎え、記念行事の中で同窓会長さまのご挨拶後、僭越ながら「可児工の六十年を振り返って」と題し、生徒に向けてプレゼンをいたしました。私自身も開校当時からの歴史をひも解く中で、改めて同窓生の皆様の活躍ぶりを実感することができました。

さて、皆さまもご存じのとおり、令和元年度からのコロナウイルス感染症による今までにない困難の中で、生徒が通常どおりの学校生活を送ることができない状態が続いています。本校の伝統的な行事である体育大会や可児工祭など多くの行事は、中止や規模の縮小を余儀なくされ、修学旅行も行先や日程を大きく変更して行いました。その他、学習面はもちろん、部活動でも、多大なる影響を受けました。

しかし、どのような状況の中であっても、生徒の学びと成長を止めることはできません。何よりも生徒たち一人一人が、この困難の中であきらめることも自暴自棄になることもなく、安全と健康に留意しながら、許される範囲内で未来に向けての取り組みを全力で続けてくれていることを、校長として心から誇らしく思います。

本校の教育目標である「教育活動のあらゆる場面をとおして、知・徳・体・技の調和のとれた地域社会から期待される人間性豊かな工業技術者を育成する」ことは、この困難で新しい時代にますます重要性を増しています。

例年と同じことができなければ、別のやり方を探したり作ったりすれば良い、取り組む内容は異なっても、目標とするものがブレなければ良いと考えます。可児工は、どのような困難の中でも生徒、職員が一丸となって、皆さまの後に続く工業技術者となることをめざしていきます。

皆さまには、今後とも本校生徒たちへの暖かいご支援とご協力、学校への忌憚ないご意見をお願いいたします。

最後になりましたが、本校卒業生の皆さまの、益々のご活躍とご発展をお祈り申し上げます。

活躍する卒業生

技能五輪体験記

(株)デンソー
永田　颯大
電気システム科
五十五回生

1　高校時代の思い出

高校時代、私は部活動に専念していました。実家から学校までが離れていたため、毎日朝早くから電車に乗り、バスケットボール部の朝の清掃活動に参加していたことを今でも覚えています。

そしてもう一つ、資格取得にも精を出していました。高校生活を送る中、様々な資格取得に挑戦し、学校側の支援もあり電気工事士や危険物取扱免許など多くの資格を獲得することができました。その経験は今でも私の仕事に活かされていると思います。

2　現在の仕事に至る経緯

私は高校三年生のころ、自分の進路を決められず悩んでいました。そんな時、当時担任の先生から株式会社デンソーを紹介してもらい、調べていくうちに技能五輪というものを知り、興味を持つようになりました。そうして私は株式会社デンソーに進む道を決め、技能五輪選手の選考試験を経て技能五輪の道を歩むことになりました。

3　大会の概要

技能五輪とは、次世代を担う青年技能者（原則二十三歳以下）が技能を競い合う技能競技大会です。技能五輪には全国大会と国際大会があります。全国大会は毎年開催され、四十二の職種に千人を超える選手が参加し、日本一を目指して技能を競い合います。それに対し、国際大会は二年に一度開催されます。国際大会が開催される一年前の年の全国大会で優勝した選手が日本代表として国際大会に出場する権利を獲得することができます。国際大会は、六十三の職種に千三百人を超える選手が世界各国から集い、その技能を競い合います。

その中で私は全国大会の工場電気設備職種という職種に出場しました。工場電気設備職種とは工場における電気設備の制御盤の組立、配線、プログラミング、異常診断を行う職種です。そして正確に制御盤を作製するだけではなく、その速さや出来上がった制御盤の見栄えのきれいさも競い合う職種になります。

大会風景（配線作業）

大会風景（異常診断作業）

4　大会の結果

私は二〇二一年と二〇二二年の全国大会に出場し、ともに銀メダルを獲得することができました。二〇二一年の大会は同じ企業の先輩選手が金メダルを獲得しましたが、二〇二二年の大会では他企業の選手に金メダルを奪われることになってしまい、とても悔しい思いをしました。

5　技能五輪を通して学んだこと

私は二年間の技能五輪の訓練を通して学んだことは、成長し続けるには変化を恐れず、新しい要素を次々と取り入れていく姿勢が大切だということです。技能五輪の訓練を進めていく中でうまく成果を出すことができず、伸び悩む時期がありましたが、そこで諦めず、先輩選手や指導員にアドバイスをもらい、そのアドバイスをとにかく実践してみました。その結果、今までとは違った視点から自分を分析することができ、さらなる成長に繋げることができました。このことから、現状に満足せず、新しい要素を次々取り入れていく姿勢は成長し続けるうえでとても大切だということを学びました。

6　高校生へのメッセージ

技能五輪の訓練を始めたばかりのころは、思うように作業ができず、様々な葛藤もありましたが、訓練を進めていくうち、自分の理想通りの作業や、理想通りの制御盤が実現できるようになり、それがいつしか私のやりがいになりました。

高校生の皆さんはこれから就職先や進学先で様々なことを経験し、ときにはうまくいかないこともあるかもしれません。しかし、どんなことでも続けていくうちに自分にしかわからない楽しさややりがいを見つけることができると私は思います。ですので、高校生の皆さんにはこれから新しいことに恐れず、たくさん挑戦していってほしいと思います。

活躍する卒業生

株式会社　トイファクトリー
藤井　昭文

平成二年三月卒
二十五回

可児工業高校からはじまる

内装屋の父の後を継ぐなら可児工業高校でいいか。当時十五歳の僕の志望動機です。それから九年後に妻と小さなキャンピングカー屋を設立。努力が実り二十年後には日本一に。そして卒業から三十年が経ったいま、僕はこの会社で世界を相手に勝負を始めています。可児工業からはじまった僕の三十年間の「卒業後」をここにまとめます。「高卒」という言葉。皆さんはどんな印象を持っていますか。僕にとって「高卒」は究極のラッキーカードです。大卒の人より四年も早く社会人スタートができるのだから。僕は小学生の頃から会社員になりたくないことだけはわかっていたので、卒業後の四年間は起業に必要な資金と経験を積みました。まずはキャンピングカーの製造技術をバイトで学んで、長距離トラック運転手で資本金を貯めました。あとは「売る力」だけだと思ったので、アパレル企業の営業部に面接に行きました。集団面接の待合室は僕以外、大学生だらけ。そこにはポツンと高卒の私が居ました。彼らのアピールポイントは「やる気」、対する僕は「経験」。彼らは「卒業してから就職したい」、対する僕は「明日からでも働けます」と高卒カードを次々に召喚しました。その翌日に早速「合格」の電話があったと母が教えてくれました。

製造技術、資金、販売力を身につけた僕は晴れてキャンピグカーの製造・販売会社『Toy-Factory（トイファクトリー）』を二十四才で起業。足りないものは何もない、準備万端の船出、のつもりでした。だけど蓋を開けてみれば『Toy-Factory』なんて誰も知らない、いくら良い車を作っても一台も売れない現実が待っていました。転機は二年後、最後のお金を振り絞って一台だけ出展した東京の大きな展覧会でした。「これが最後だ」と妻は言いました。たくさんの人たちが僕たちの車の前を通り過ぎていく中、二人の男性が腕を組んでじっと眺めている姿を、僕はジッと見つめていました。しばらくすると彼らは僕に声をかけ「小学館のライターの〇〇です。ようやく日本もこういうスタイルの時代が来たんだね」と言ってくれました。何が他と違ったのか。

ドイツにて

それは圧倒的な実用性です。僕たち夫婦は子供をつれた家族旅行には必ず自家製のキャンピングカーを使い、実体験を元に本当に生活のできる車を作っていました。他の企業がワイングラスを並べるような表層的なデザインに迷走していた中、僕たちの車は実に革新的だったのです。口コミが広まりお客さんの数も徐々に増え、そろそろ他の企業が実用性に目を向けるようになったその頃、僕はイタリアに飛びました。キャンピングカーの本場である欧州のデザインを『Toy-Factory』に取り込むためです。その時ミラノで参加した世界最大規模の家具・デザイン展覧会で得た知見から開発したスタイルは、その後約十年間、日本のキャンピングカーの基準であり続けました。そして、キャンピングカーアワード総合受賞を連続受賞し、そろそろ他の企業が欧州風のデザインに染まったその頃、今度は愛すべく地元の、東濃ひのき、尾州織物のファブリック、美濃焼タイルなどをふんだんに使い地産地消のスタイルで家庭的な空間を提案。それも見事に大ヒット！！二ヶ月で三百台をセールスする記録も作りました。『はじまりはいつもトイファクトリーから』という信念を胸に、快適性とデザイン性の二本柱を背に、Toy-Factory は今日まで日本のキャンピングカーを牽引してきました。

ステランティスグループ契約式

僕たちの事業はキャンピングカーの製造に留まりません。大学生たちと作製したソーラーカーでオーストラリア大陸の荒野を走り抜けたり、ケニアやネパールに向けてドクターカー（本格的な医療機械を搭載した緊急車両）を製作したり。また災害が起きれば市や消防隊の指令拠点として運用したり、幅広い分野で人々の役に立っています。実は、ここだけの話、新しい目標があります。僕は Toy-Factory で次世代モビリティーの一翼を担いたいのです。自動運転車や空飛ぶ車の案件を扱う未来は現実的にやってきます。それが岐阜県の、この可児市からスタートできるって、考えただけでワクワクしませんか。Toy-Factory は可児工業高校から毎年新しい社員を募集しています。自分をチャレンジしたい人。世界にチャレンジしたい人。世界に挑戦できる場所は可児工業高校から車で五分です。

トイファクトリー株式会社
代表取締役　藤井　昭文